

「餅」

ニシオカ・ト・ニール

弟が座っている。

弟は姉を待っている。

ドアのチャイムが鳴る。やがて連打される。

弟、しづしづ開けに行く。

弟、姉、入って来る。姉、派手な恰好。

弟「なんで？」

姉「え？」

弟「なんで家の鍵持って無いの？ 持ってるでしょ？」

姉「無くした」

弟「は？ いつ？」

姉「ずっと前」

弟「じゃあ言ってよ」

姉「は？ 何で？」

弟「何でって…。こっちだつて鍵変えないとダメだろ？」

姉「別に変えなくていいでしょ」

弟「はあ？ どうすんだよ、泥棒入って来たら」

姉「いやいやいや、ここ札幌ね。鍵無くしたの東京だから。わざわざ東京の泥棒が札幌まで

来ないでしょ」

弟「万が一ってこともあるでしょ」

姉「無いよ。絶対無いよ。泥棒は交通費かけないから」

弟「そんなの分かんないだろ」

姉「どんだけ用心深いんだよ」

弟「そういう性格なんで」

姉「変わらないね」

弟「そう簡単には変わらないよ」

姉「私は変わったけどね。トランスフォーム！ なんちゃって！」

と、姉がおどけてみせる。

弟「……」

姉「おい。何か言えよ。お姉ちゃんだぞ」

弟「姉ちゃんは、何にも変わってないよ、昔っから。変わってないって言うか、成長してない」

姉「黙れ」

弟「そっちが何か言えって言ったんだろ」

姉「……」

弟「……線香、挙げて来れば？」

姉「案内してよ」

弟「向こうの部屋」

姉「わかんない」

弟「わかんないってなんだよ、そんなにたくさん部屋無えよ、うち」

弟、姉を別の部屋へ連れて行く。そこには亡くなった父の遺骨がある。

弟は姉を残し先に戻ってきて座る。

SE：チーン

奥の部屋から線香の匂い

少しして、姉が戻って来る。

姉「……何か雰囲気出ないね」

弟「……」

姉「何ていうのかなあ、あんな小さい箱見せられてもさあ」

弟「はあ？」

姉「だからさ、何か遺骨だけ見ても実感ないって言うの？え？これがお父さん？

みたいな？」

弟「だったら、デカイ箱に入ってるうちに見に来いや。つか、箱に入る前に帰って来いや」

姉「それは、ごめん」

弟「……」

姉「そんなカリカリしないで。若くして、うちら兄弟二人きりになっちゃった訳だし」

弟「何が若くしてだよ。姉ちゃんもう40だろ？」

姉「全然違うよ、まだ38だよ！」

弟「ったく。いい年して、変な恰好して」

姉「はあ？おしやれでしょ？」

弟「姉ちゃんと同級生でそんな恰好してる人いないよ」

姉「田舎と比べないで」

弟「東京にだってそんなアラフォーいないだろ」

姉「いるよ」

弟「いないよ。吉瀬美智子さんも中谷美紀さんも篠原涼子さんも、そんな恰好してないだろ」

姉「そのラインと比べないですよ。ていうか、何をスラスラ綺麗どころ並べてんのよ。びっくりするんだけど。あんたこそ何その変な髪型。髪の毛伸ばして、何そのゴム。サッカー選手」

実は弟はロン毛でサッカー選手みたいにゴムでヘアバンドにたいにしている！

弟「うるせえなあ。…なんで帰ってこなかったんだよ」

姉「だから、仕事だって」

弟「何が仕事だよ。遊びだろ！」

姉「遊びじゃないよ！」

弟「遊びだよ！」

姉「遊びじゃないよ、お金もらってやってるんだから！」

弟「じゃあそんな仕事辞めちまえよ！」

姉「はあ？」

弟「姉ちゃんの仕事なんか、無くなったって誰も困らないよ」

姉、イライラして、テーブルの上のものを投げつけようとするが、やめる。

姉「……。」

弟「ほら」

姉「何？」

弟「むかつくのはね、凶星だからなんだよ」

姉、再びイラついてものを掴み、握りしめ、そっと置く。

弟「店、たたむことになったから」

姉「え？」

弟「えって何だよ。親戚一同で話し合って決めたことだから」

姉「勿体なくない？あんた継ぐんじゃないの？」

弟「継がないね」

姉「何で？お父さんの下で修行みたいな感じで働いてなかった？」

弟「うるさいなあ」

姉「だって、働いてたよね？辞めちゃったの？」

弟「そうだよ、働いてたけど辞めちゃったの」

姉「何で？」

弟「何でって、それ姉ちゃんに話す必要がある？」

姉「あるよ、だってお姉ちゃんだもん」

弟「理由になってない」

姉「なってるよ！ 家族なんだから、聞く権利あるでしょ」

弟「家の事何にもしてなかったくせに、何にも知らない癖に、権利ばっか主張するなよ！」

姉「だからごめんて言ってるじゃん…（凹む）」

弟「…向いてなかったの、俺には」

姉「……え？」

弟「なんだよ」

姉「向いてないからって…そんな理由？ そんな理由で辞めたの？」

弟「…そうだよ」

姉「え？え？マジで？そんな理由で辞めたの？80年も続いた由緒ある

和菓子屋だよ…？この辺りじゃ、結構な人気店だよ？」

弟「姉ちゃん全然わかってないと思うけど、店を継ぐってすっごく、すっごく大変なのね？修行して伝統の味を出せるようになるだけじゃないんだ。伝統守りつつも、新しいお客さんも増やさないといけないんだわ。でも古いお客さんも大事でお付き合いもいっぱいあって、全然話の分からないおじさんに話し合わせたり、父さんと比べられてあーだこーだ言われたり、町内会の祭りに出すちようちんの数で文句言われたり、メガネなおせって言われたり、やったこともないのに草野球でセンター守れって言われたり、すっごいの、本当にすっごいんだわ、すっごいの」

姉「だからって諦めなくてもさ、親戚に相談したり、できるでしょ。他に頼れる人がいるじゃん」

弟「……………」

姉「頑張ってたっしょ？ 店畳むなんて勿体ないよ」

弟「そう思うなら、姉ちゃんが戻って来てやりなよ」

姉「は？」

弟「まだ間に合うよ、こっちでお見合いでもして、結婚してさあ」

姉「ちよっと急に何言ってるの？」

弟「分かってるんでしょ、自分でも。もう諦めて戻ってきなよ」

姉「それは無理」

弟「売れるわけ無いじゃん。3人組の歌手だか何だか知らないけどさ」

姉「うるさいなあ」

弟「何だよ、三人組の歌手って。サンボマスターでもあるまいし」

姉「なんで三人組の歌手の一番手前にサンボマスターが出てくるわけ？」

せめて女の子三人組出してよ」

弟「そんなの最近いないだろ……………アルフィー……………？」

姉「女の子！いるでしょ、パフュームとか」

弟「パッ!!!????? どの面下げて」

姉「うるさいなあ！ 女の子三人組の例として言っただけでしょ？」

弟「誰が見るんだよ、おばさんパフューム……」

姉「うるせえ、黙れ。私がやってるのは、今まで誰も見たことが無いセンサーショナルな音楽なの！」

弟「全く理解できない」

姉「そうだよ、アンタみたいな田舎者には絶対に理解できない世界が、東京にはあるの。」

そしてそこで、私は生きてるの」

弟「あっそ。じゃあ、姉ちゃんが暮らしている東京の世界では、自分の親が死んでも

葬式に出なくていいんだ。」

姉「だから、ごめんって言ってるじゃん」

弟「許さない」

姉「はあ？」

弟「無いの？ ほぼ男手ひとつで俺たちを育ててくれた父さんに、感謝の気持ちとか

無いの？ 無いわけ？」

姉「だからごめんって」

弟「俺じゃなくて、父さんに謝れば？」

姉「……」

弟「謝らないんだ」

姉「だってもう死んじゃったし」

弟「いるかもしれないよ、この辺に？」

姉「マジ？ あんた霊感あるの？」

弟「そうじゃないでしょ、親族の心理でしょ？」

姉「ああ……」

弟「『ああ』って……鬼だな」

姉「鬼?!」

弟「あんたのことだよ!なぜピンと来ない?!信じられねえ。それでも娘?父さん、死ぬ直前までずっと姉ちゃんのこと……」

姉「(遮って)んあ〜!!」

弟「?!」

姉「言わないで」

弟「何?」

姉「お父さんが何て言ってたとか、あんまり聞きたくない。気まずいじゃん」

弟「変な奴だって」

姉「は?」

弟「姉ちゃんのこと。変な奴だってだって言ってたよ。どうしようもない娘だって」

姉「はあ?」

弟「思ってたのと違った?」

姉「いや、別に……」

弟「もっと優しい言葉だと思った?心配してるとか言われると思った?残念だったね」

姉「ムカつく!」

弟「あいつは物心ついた時から変なやつだったから、多分普通に結婚とかできないだろう、いい年して、東京で変なこととして、理解はできないって」

姉「親父マジむかつく……死ぬ……!」

弟「もう死んでるし」

姉「じゃあ、地獄へ落ちろ」

弟、小箱を出してくる。



姉「何？」

弟「開けて。」

箱の中には、大福が入っている。

姉「……大福？」

弟「父さんが、最後に作ったやつ。」

姉「……。」

弟「亡くなる2日前に作ってくれた。病人の癖に、無理して結構沢山作っちゃってさ。」

通夜の時に、親戚に配ってみんだで食べたんだけど

姉「アンタは食べなかったんだ」

弟「食えないよ。食えないでしょ。この大福は、親父の形見だ」

姉「えっ？大福が？」

弟「文句ある？」

姉「……亡くなる2日前に作ったんだよね？」

弟「そうだけど？ 何？」

姉「(指で数えて) 一週間前か……。」

弟「はい？」

姉、箱から大福を取り出す。

弟「おいちよっと、何するんだよ！」

姉、大福を食べようとする。

姉と弟、暫くもみ合いになり、最終的に姉が、弟の攻撃を切り抜けて  
大福を食べる。

弟「おいっ！父さんの最後の…父さんの最後のやつだぞ！もう、一生食べれないんだぞ……  
何とか言えよ！もう！もうっ！」

姉「（飲み込んで）……おいしくない。もう、餅も固くなってるし、あんこも小豆の香りが  
全然しない。こんなお父さんの大福じゃないよ…」

弟「……。」

姉「美味しいうちに食べないと、だめだよ」

弟「……。」

弟「アンタは、そのチャンスがあったのに」

弟「？」

姉「アンタは、親戚と一緒に美味しいうちに食べれたのに……何で逃すの？」

弟「は？」

姉「なんでチャンスを見すみす逃すの？なんですぐ諦められるの？超羨ましいんだけど  
ど私もすぐ諦める人になりたかったんだけど」

弟「……姉ちゃん……」

姉「…何？」

弟「それがあいつの生き方だから、いいんだって」

姉「は？」

弟「変な奴だけど、それがあいつの幸せな生き方だから、それでいいんだって」

姉「…は？」

弟「…だから、親父からの伝言」

姉「…キモイんだけど」

弟「は？」

姉「それが私の生き方とか、キモイんだけど。別に、そんなつもりないし。お父さんとお母さんだからね、こんなエキセントリックな娘に育て上げたのは！」

姉「勝手に理解しないでよ。お父さんが死んで、全て投げ出して実家に帰って来る口実出来たと思ったのに、死んでまで背中押さないでよ、また東京で頑張らなきゃいけないっちゃったじゃん！ 親父！この！クソ！出て来いや！どこにいるんだよ！この辺か？部屋の四隅か？」

姉、部屋の中で父の霊を探し始める。

弟「ちよつちよつと姉ちゃん、姉ちゃん、怖いよ」

父を探し回る姉を、弟が止める。

姉「…頑張りたくなっちゃったじゃんかよ！チャンスなんか一生回って来なくても、頑張り

たくなっちゃったじゃん」

弟「…じゃあ、やるしかないね。死ぬまで」

弟、一旦はける。

姉「どい行くの？」

SE：チェーン

弟、木の箱を持って入って来る。

姉、箱を開ける。

姉「え？ まだあったの？」

弟「本当はこれが姉ちゃんの分」

姉「私の分、ちゃんとあったんだ」

弟「ムカついてたから、渡さないつもりだったんだけど。…はい」

姉「いや、いいよ、私さっき食べたから。これアンタがもってなよ」

弟「そう？それじゃあ」

弟、大福を食べようとする。

姉「えっ？食べるの？」

弟「俺は、チャンス逃す人間にはなりたくないから」

姉「…え？」

弟「自由に生きろって言われてるから」

弟、大福を食べる。

弟「うわっ！マズい…」

姉「…（笑い出す）」

弟「（笑い出す）てか、酸っぱくない？」

姉「うん、酸っぱかった」

弟「だよね、これ腐ってるよね」

弟と姉、笑い合う。

姉「ねえ」

弟「何？」

姉「やばい」

弟「え？」

姉「めっちゃお腹痛くなって来た」

弟「え？」

徐々に暗転しはじめる

曲

姉「だめだ、めっちゃお腹痛い、ちょっとトイレ！」

弟「待って俺も行きたいんだけど！」

姉「いや、私が先だから！」

弟「いや、俺の方が早く終わるから」

姉「はあ？」

弟「はあ？」

弟と姉がケンカをしていく中、暗転

おしまい